ユーゲント・フィルハーモニカー
第 9 回定期演奏会

2015 年 3 月 21 日（土）

開演 18:30（開場 17:30）

すみだトリフォニーホール 大ホール

program

R. シュトラウス | **交響詩《ドン・ファン》Op.20**
Richard Strauss | "Don Juan", Tondichtung nach Nicolaus Lenau, op.20

J. ブラームス | **交響曲第 3 番 ヘ長調 Op.90**
Johannes Brahms | Sinfonie Nr. 3 in F-Dur, op.90

-- 休憩 --

B. バルトーク | **管弦楽のための協奏曲 Sz.116**
Béla Bartók | Concerto for Orchestra, Sz.116

※開演中は携帯電話の電源をお切り下さい。
※他のお客様のご迷惑となりますので、演奏中のお席の移動はご遠慮ください。

代表挨拶

本日は、ユーゲント・フィルハーモニカー第9回定期演奏会に足をお運びいただき、誠にありがとうございます。

ユーゲント・フィルは結成から10年目を迎えました。今年度も様々な施設から演奏をする機会をいただき、楽団のテーマの一つである社会への貢献する形を模索しつつ、またそのうえで社会とのつながりを実感することができた有意義な1年間でした。

ユーゲント・フィルでは日ごろから、練習や訪問演奏などの活動に取り組んでおりますが、本日まで10年間欠かさず活動ができたことはたいへん感慨深く思います。これまで演奏を聴いていただいた皆様への感謝を込め、これからもさらに実のある一年にしたいと考えております。

今回の演奏会は前回、前々回に引き続き三河正典先生のもとお送りします。難曲が三本という異色なプログラムではありますが、これまでの10年間で作り上げてきたユーゲント・フィルという個性にはよくあった曲目ではないかと考えています。私たちの個性がにじみ出るような今回のプログラム、どうぞお楽しみください。

最後になりますが、今回ご指導いただいた三河正典先生をはじめ、演奏会にお力添えいただいた皆様、そしてご来場いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

ユーゲント・フィルハーモニカー代表　本郷 一真

指揮者紹介　三河 正典　MIKAWA Masanori

東京藝術大学作曲科および指揮科に学んだのち、パリ・エコール・ノルマル音楽院に留学、満場一致の首席で卒業。作曲を北村昭、佐藤眞、近藤譲、池野成の各氏に、指揮を小林研一郎、松尾葉子、秋山和慶、河地良智、ドミニク・ルイッツの各氏に師事。さらに、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチの元で研鑽を積む。

第4回ブルー・ダニューブ国際オペラ指揮コンクール第4位、審査員特別賞受賞。ブルガス歌劇場（ブルガリア）にてヴェルディ作曲「椿姫」を指揮。

これまでに日本フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、京都市交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、サンクトペテルブルグ交響楽団、ロシア・トムスクフィルハーモニー交響楽団、サンクトペテルブルグ・カルペ・ディエム室内管弦楽団、パザルジク交響楽団（ブルガリア）、浙江交響楽団（中国）、小田原フィルハーモニー交響楽団、湘南弦楽合奏団、ヴォーチェ・ソナーレ（合唱団）など、国内外のオーケストラ、合唱団を指揮する他、新国立劇場、二期会をはじめとするオペラ公演や、サイトウキネンフェスティバル、アルゲリッチ音楽祭などで合唱指揮者、アシスタントコンダクターとしても活動している。

2005年～2007年、日本フィルハーモニー交響楽団指揮研究員。

現在、東京藝術大学および東京音楽大学、同大学院指揮科、声楽科（オペラ）講師を務め、後進の指導にもあたっている。

楽団紹介

Jugend Philharmoniker（ユーゲント・フィルハーモニカー）は、財団法人「日本青年館」の音楽行事（オーケストラフェスタ、全国高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユンゲ・オーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設されたオーケストラである。

選抜オーケストラが母体となっているため、メンバーは様々な大学オケ出身のプレイヤーが揃っている。現在、団員約80名を越えるオケにまで成長し、定期演奏会を中心とした活動の他に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、その他、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。

音楽的に人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≒プロオケには出来ないこと）」を追求することを理念としている。

ユーゲント・フィルハーモニカーは、今年で創設から10年目を迎える。少しずつ変化、進化を遂げながらも、創設当初のコンセプトに変わりはない。ユーゲント・フィルに受け継がれてきたものがあるのと同じように、大作曲家たちの間にも、世代を越えて、あるいは同世代同士で、受け継がれてきた教えや信念はたくさんある。

R. シュトラウス ｜ 交響詩《ドン・ファン》Op.20

若いころのリヒャルト・シュトラウス（1864-1949）にとって、ブラームスは作曲のお手本の一人だった。20代までに書かれた室内楽曲には、その痕跡がとりわけ色濃く表れている。31歳年長の巨匠とシュトラウスが初めて対面したのは、1885年、シュトラウスが21歳にして宮廷指揮者に就任したマイニンゲンでのデビュー・コンサートのときのこと。プログラムの前半はブラームスの《セレナーデ》第2番で、後半はシュトラウスの交響曲ヘ短調だった。客席にいたブラームスは終演後、シュトラウスにこんな助言を与えたという。「シューベルトの舞曲をよく勉強し、それから平易な8小節単位の旋律を書いてみなさい。」

後にシュトラウスが大作曲家になれたのは、ブラームスの教えをよく守ったからなのかもしれない。指揮者として活動を始めたシュトラウスが作曲家として真のスタートを切ることとなった作品が、交響詩《ドン・ファン》である。今はなき「N響アワー」のオープニング・テーマとして馴染み深い方も多いだろう。マイニンゲンの次の赴任地ミュンヘンで1888年に完成され、さらに次の赴任地ワイマールで翌年に初演され、大成功を収めた。ドン・ファンといえば、モーツァルトのオペラ《ドン・ジョヴァンニ》で有名な好色男の伝説。古くから多くの文学作品の題材となったが、シュトラウスが交響詩の翻案に選んだのは、オーストリアの詩人レーナウによる叙事詩だった。スコアの冒頭には、その抜粋が記されている。

風を切るような冒頭に続いて、男性的な楽想と女性的な楽想が順に駆け抜ける。ところが、かつて殺めた騎士長の息子との決闘のさなか、ドン・ファンは突然虚無感に襲われる。ゲネラル・パウゼ（総休止）の後、それまでのホ長調が完全に打ち消されてホ短調となり、ドン・ファンの終わりが告げられる。

J. ブラームス ｜ 交響曲第3番 ヘ長調 Op.90

《ドン・ファン》の華々しい初演に先立つこと6年、1883年にはウィーンでヨハネス・ブラームス（1833-97）の交響曲第3番が初演された。指揮をしたリヒターは、新しい交響曲をベートーヴェンの交響曲第3番になぞらえて「エロイカ」と讃えたらしい。

ブラームスが交響曲を作曲するとき、いつでもベートーヴェンが念頭にあったことは間違いない。しかしブラームスの第3交響曲を聴くたびに、とりわけ第1楽章と第4楽章の響きのそこここに感じられるのは、リヒャルト・ワーグナーの影である。形式を重んずるブラームスと内容を重視するワーグナー、という対立構図は当時から何かと議論になり、実際彼らも互いに敵対視しないではなかった。とはいえ同時に、互いの敬意も並々ならぬものだったようだ。1863年にワーグナーの演奏会を聴いたブラームスは、友人への手紙に「私はワグネリアンと呼ばれるかもしれない」と綴っている。ブラームスが第3交響曲に取り掛かる直前の1883年2月、奇しくもワーグナーは亡くなった。決定的な証拠こそないものの、この作品がワーグナーへのオマージュのように思えてならない。

今回をもってユーゲント・フィルは、4つあるブラームスの交響曲すべてを演奏することになる。第3番は全4曲のうちでもっともコンパクトで（だからといってプログラムの真ん中に置かれることはめったにない）、明快で古典的な形式感を持つ一方で、長調と短調とを行き来する響きやねじれたリズムによって、ロマン派の終焉が見え隠れもする。

第 1 楽章　アレグロ・コン・ブリオ、ヘ長調、4 分の 6 拍子。
第 2 楽章　アンダンテ、ハ長調、4 分の 4 拍子。
第 3 楽章　ポコ・アレグレット、ハ短調、8 分の 3 拍子。
第 4 楽章　アレグロ、ヘ短調――ヘ長調、2 分の 2 拍子。

B. バルトーク ｜ 管弦楽のための協奏曲 Sz.116

時代は一気に下り、第二次世界大戦の真っただ中、ベーラ・バルトーク（1881-1945）はニューヨークのサナトリウムにいた。ナチスの力が蔓延した故国ハンガリーを離れざるを得なくなったバルトークは、慣れない環境での生活が祟ったのか体を壊し、活動もままならなくなっていたのである。彼を財政的に助けたいという人々の力が集まり、指揮者クーセヴィツキーによる委嘱作品として作曲されたのが、《管弦楽のための協奏曲》である。1943 年の夏、サナトリウム入院中に着手され、2 か月足らずという速さで完成された。

作曲家、民謡採集家、民族学者、教育者、ピアニスト――音楽家としてあらゆる顔を持つバルトーク。《管弦楽のための協奏曲》は、彼の音楽家人生の集大成とも呼ぶべき作品である。たとえば民謡採集家としては、第 4 楽章の第 1 主題はスロヴァキア民謡の旋律がもとになっていたり、同じく第 2 主題はハンガリーの作曲家ヴィンチェのオペラから取られていたりする（中間部でクラリネットから始まるあざけりのような下降音階の旋律は、ショスタコーヴィチの交響曲第 7 番からの引用である）。またこの協奏曲は、楽器それぞれの特性やその組み合わせを巧みに示しながら、聴く人にオーケストラのおもしろさや奥深さをデモンストレーションする、教育的な側面も持つ。

因みにそんなバルトークにも、ブラームスやシュトラウスに傾倒した時期があった。学生時代に書かれた未完の交響曲変ホ長調には、シュトラウスを研究した成果が如実に表れているし、その第 3 楽章のスケルツォは明らかにブラームス風である。ブラームスのピアノ協奏曲第 2 番のスコアの草稿を、バルトークが持っていたこともあったという。

初演は 1944 年 12 月、ボストンにてクーセヴィツキーの指揮で行われ、これはバルトークが人前に出た最後の機会となった。彼によって書かれたプログラム・ノートの終わりには次のように記されている。「この作品の雰囲気には全体的に――冗談交じりの第 2 楽章は別として――、第 1 楽章の厳しさと第 3 楽章の沈痛な死の歌から、第 5 楽章の生の表明への、段階的な変化が表現されている。」

第 1 楽章　序章
第 2 楽章　対の戯れ
第 3 楽章　悲歌
第 4 楽章　中断された間奏曲
第 5 楽章　終曲

駆け出しの 24 歳のシュトラウスが作曲家として初めて名を成した《ドン・ファン》、名実ともに順風満帆のブラームスが 50 歳で完成させた交響曲第 3 番、そして、62 歳のバルトークが晩年に「生の表明」として書き上げた《管弦楽のための協奏曲》。改めて見ると本日のプログラムは、3 曲を聴くことでまるで一人の音楽家の一生を追うかのようである。

中村 伸子（音楽学）

活動紹介

2014 年

3 月 21 日	第 8 回定期演奏会（すみだトリフォニーホール）
4 月 5 日	訪問演奏（デイ・ホーム上北沢）
5 月 24 日	訪問演奏（イムス三芳総合病院）
5 月 31 日	訪問演奏（デイ・ホーム上北沢）
6 月 7 日	訪問演奏（よこはま動物園ズーラシア）
7 月 20 日	訪問演奏（障害者支援施設きずなの里）
8 月 23 日	訪問演奏（イムス三芳総合病院）
9 月 12-15 日	第 7 回農村プロジェクト（長野県上田市武石）
	訪問演奏（老人保健施設いこい、丸子中央病院）
9 月 27 日	訪問演奏（デイ・ホーム弦巻）
11 月 22 日	第 5 回室内楽演奏会（大田区民センター音楽ホール）
12 月 13 日	訪問演奏（イムス三芳総合病院）
12 月 20 日	訪問演奏（よこはま動物園ズーラシア）
12 月 22 日	訪問演奏（よこはま動物園ズーラシア）

2015 年

1 月 10-11 日	合宿（山中湖畔荘 ホテル清渓）
2 月 7 日	訪問演奏（デイ・ホーム芦花）
3 月 21 日	第 9 回定期演奏会（すみだトリフォニーホール）

▲よこはま動物園ズーラシアでの演奏風景

依頼演奏

ユーゲント・フィルハーモニカーでは学校・老人ホームなどの福祉施設や、その他各種イベントなどでの依頼演奏を受け付けています。詳しくは当団 Web サイトをご覧下さい。

Web サイト　http://jugend-phil.com/

次回演奏会のお知らせ

ユーゲント・フィルハーモニカー　第 10 回定期演奏会

2016 年 3 月 12 日（土）昼公演

於 すみだトリフォニーホール 大ホール

曲目未定

■後日ご案内をお送りしますので、アンケート用紙にご連絡先をご記入ください。

お問い合わせ　http://jugend-phil.com/（当団 Web サイト）

公式 Twitter アカウント　@jugend_phil：ユーゲント・フィルハーモニカー